



仙台で講演。改めての思いは

今年は4年に一度の冬の祭典、ソチオリンピックが開催され、日本はスノーボード陣や男子フィギュアスケート、そしてジャンプ競技などでメダルを獲得し、大いに盛り上がりました。特に印象的だったのは、男子フィギュアスケートで初の金メダルに輝いた仙台出身の羽生結弦選手が競技後の記者会見で、東日本大震災の体験やその後の苦労に触れていたことです。東北出身の選手は他にも10人以上が出場しており、大震災から3年近くを経て力一杯活躍する姿に、大きな感動を覚えました。

さて、ソチオリンピックが盛り上がる少し前のこととなりますが、去る1月24日、私も仙台へ行って来ました。その日は仙台を本拠地にする楽天イーグルスの田中将大投手が、ニューヨーク・ヤンキース入団を発表した翌日とあって、そちらの方が盛り上がっていた中、私自身が伺ったのは「東北遊商25周年記念式典」です。私はかねてより遊技関係の歴史などをまとめる仕事に携わっており、今回式典の中で25年間の業界および遊技機の動きについてご紹介する、という役目を仰せつかったのです。

今現在も、日遊協をはじめとする業界団体が復興に向けて尽力されている通り、東北地方の現状はホールの廃業が続いたり、ほとんど復旧できていない地区も少なくないようで、まだまだ大きな爪痕が残っているのを感じざるを得ません。私

自身も、何かお役に立てることがあれば…とと思っていましたので、微力ながら今回参加させて頂き、約25年を振り返ってみました。東北遊商が

設立された1988年といえば、ちょうど昭和の末期でバブル経済のまっただ中。パチンコでは10カウント機が定着し、いわゆる「旧要件」と呼ばれていた時代です。私も当時はよくパチンコやパチスロを打っていましたが、よく聞く「パチンコは不況に強い」という言葉は当てはまらないと思います。体感的にやはり庶民の懐が潤い、将来に悲観的になることが少なかった当時の方が、一玉4円や一枚20円の遊技代に沢山お金をかけられる人が多かったと思います。

その後、プリペイドカード時代が到来してホールの設備投資がかさみ、遊技機にも液晶モニターやタイアップやらが加わって、多額の投資が行われるようになります。90年代中頃までの市場ではギャンブル性の高いCR機がもてはやされ、30兆円産業と呼ばれるまでになりますが、自粛後はエンターテインメント性の追究に重きを置くようになり、TVCMなど巨額の宣伝広告費が動く業界に変貌。しかし、現在では低玉貸し営業も苦戦する状況となり、いかにファン離れを食い止めるかが課題となっています。

25年という期間には、カード（CR機）、タイアップ、液晶モニター、種別撤廃など現在につながる大きな改革も誕生しているものの、さらに発展していくためにはタブーを打ち破ったり、発想を転換することも必要なのではないかと…。当日、壇上ではそのようにまとめさせて頂きましたが、今後はさらに適正な中古機流通のニーズも高まるはずで、様々な方面から業界を盛り上げていくことが重要ではないかと思っています。

そうした期待および、いくたびの困難に立ち向かってこられた東北遊商の25年間の歩みに敬意を表しつつ、今後ますますの発展をお祈りしております。折しも、東日本大震災から3年。改めて「東北頑張れ！」と、エールを送らせて頂きたいです。

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（パジリコ、07年）

25周年記念式典



東北遊商・高橋一則理事長と